

---

# 超魔妖霊

烏骨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超魔妖霊

### 【コード】

N0998R

### 【作者名】

鳥骨

### 【あらすじ】

主人公：近能 陣を中心とした物語です。たぶんおもしろいと思います。

ぜひよんでみてください

## 世界観 & a m p ; プロローグ

### 世界感

ここは天国と地獄の間の世界 >> ブレスル <<

すべてが自由にできて なにもできない

魔法が使えるし 超能力だって使える

妖怪もいるし 人もいる 妖精、幽霊、魔物、天使、悪魔

すべてが混ざり合った世界…。

今、>> ブレスル << を舞台にした、壮大でとてもちっぽけでもあ  
る。

不思議で奇妙な物語が始まる

### プロローグ

やばい、奴らをとめないとこの世界が崩壊してしまう。

少年は手を前にして呪文を唱える。すると、前方にたくさん魔法  
陣が現れた。

「よし、これで準備ができた。…」

## 世界観 & a m p ; プロローグ (後書き)

読んでくださりまことにありがとうございます。  
次もぜひよんでください。

## 第一章

【第一章】 始まり

時は妖暦36年…。

ブレスルには三つの世界がある。人のアース、妖のデバリス、霊のフェレペス…。

アースにある超能力専門学校に少年がいた。その少年の名前は近能陣。こんのつじん

今日もいつものように友達と話していた。

「なあ陣、精神力テストどうだった？」少年が陣になれなれしく話しかけてきた。

少年の名前は真銅鑿、しんどうかん僕と同じクラスの友達だ。

「まあまあだったよ。また60だった」

この学校では月に一度、精神力テストが行われている。このテストでは自分の精神力がどれくらいなのかをチェックするものなのである。精神力10で一時間集中できることになる。50でレポートを一日一回やることができる。といっても超能力には性質がある、いくら頑張ってもできないものはできないのだ。また、性質があつていれば精神力が足りなくても使うことができる。ようは精神力なんてただの目安にすぎないのだ。

「60かやつぱ陣はすごいな。俺なんか、30だよ。」

「鑿のほうがすごいじゃないか前回より10も上がっている」

「まあね」嬉しそうに言う

学校が終わり、家に向かっている途中だった。

いつものように商店街を歩いていると、地面が盛り上がり下から体は骨で手には杖を持ち目が赤く光っている悪魔が現れた。

「我、デビルナンバー悪魔番号63589ノ名ニオイテ命ズル我ガ黒魔力ヲカテニシテ炎ノ化身ヲ作り上ゲ口。デビル・サモン黒召還魔法：炎、発動。イデヨ！ヒート・バット」

空中に黒い光を放つ魔方陣があらわれた。ピカッ魔方陣が一瞬すごい光をはなつ。そこには体に炎を纏ったコウモリがたくさん現れた。なんだ、あいつは？とりあえず逃げなきゃ！足がすくんで動けない。周りの人々は叫びながら逃げていく。僕も早く逃げないとやばい。たのむ！足動け。

ヒート・バットが俺に向かって飛んでくる。

「うわぁー！」目を閉じた。

あれなんともないぞ。そつと目を開けてみると僕の周りは水に囲まれていた。外の様子をよく見ると杖を持ち腰に双剣を装備した青い目の少年がいた。「ついに見つけたぞ悪魔」と呟き杖を前に出した。

「我、いっそうひょうりゅう羅の名において命ずる我が魔力を用いて我が杖の力を武器に宿せ武器強化魔法：水、発動」

腰についている双剣が空中に浮き、杖から水が発生し双剣に纏わりついた。少年は手に双剣を持ち杖をしまった。

少年は悪魔に向かって走り出した。悪魔に切りかかった。

バシッ悪魔は素手でガードした。少年は右手で悪魔に切りかかる。

それより早く悪魔のパンチが炸裂した。

「グヘエツ」口から血をはく。また、悪魔に向かって切りかかる。

悪魔は剣を殴る。すると体の回りに水が纏わりつく。「ナンダ コレハ。」少し動揺した。目が一瞬赤く光ったかと思うと水が消しとんだ。

「ナカナカヤルナ。シカシ、ワタシモヒマデハナイノダ。サラバダ。」  
「と言いついに残し消え去った。」

「おい！まてっ！」

その時にはもう悪魔の姿はなくなっていた…。

「くそつまた逃げられた。」少年は手を握り締め、唇をかんて言う。そして、少年は立ち去っていく。

気がつくと僕の周りにあつたはずの水はなくなっていた。  
「君はいつたい誰なんだ？」陣は呟く…。

## 第一章（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

続きもまだ書きますのでよろしく願います。

## 第二章

### 【第二章】ライブラリ

僕は昨日の少年のことが気になりつつ学校へと向かう。

昨日の少年はいったい誰だったんだろう。歩きながら考える。いつものように商店街を通るが荒れ果てていて本当に商店街なのか疑うほどだった。そんなことを考えていると後ろから誰かに声をかけられた。

「おい、陣。」盃が話しかけてくる。

「昨日ここで何がおきたか知ってる？」歩きながら聞いてきた。

「一応、知ってるけど…。」少しとまどいしつつ応える。

「おっ、知ってるんだ。おしえてよ。」キラキラした目で言った。

僕は悪魔のことや少年のことを丁寧に話した。話し終わった頃にはもう学校についていた。

「そんなことが起こったんだ…。」

二人は下駄箱で靴をはきかえて廊下を歩いていく。

「今日の放課後、悪魔について調べてみない？」盃が尋ねる。

「いいよ。でもどこで？」

「やっぱり、アーライブラリ超魔力図書館かな。」

「そうだね。僕もそこがいいと思うよ。」

「放課後にいこうか。」

「うん。」

しばらく歩き教室についた。

「ねえ、陣と盃。昨日、商店街でガイコツのコスプレをした変態が現れたんだってしてた？」「少女が話しかけてきた。この少女はおとなじりん音無鈴、レポートが得意の女の子である。」

どこで情報が捻じ曲がったのだろう。少し疑問に思った。

「いいにくいんだけどいいかな。」陣が言う。

「別にいいけど何？」

「商店街のことなんだけどそれ間違ってるよ。」

「えっ嘘！」鈴は少し驚く。

僕は昨日のことについて鈴に話した。

「それですごいね。私も悪魔見てみたかったな。」

「みないほうがいいと思うけど……。」

「みんな席に座れ。座らねえとハアハアハアハア」栗城先生くじきが途中から笑いだす。

栗城先生は喋っている途中にいきなり笑い出す人だ。なぜ、いきなり笑い出すのかは誰も知らないと思う。

「ハアハアハアハアハアハア」

まだ、栗城先生が笑っていた。周りを見るとみんなはもう席に座っていた。僕も席に座った。

「みんな席に座ったか。これからホームルームを始めたいと思うのだが話さなくちゃいけないことがある。みんなの中にはもう知っている奴もいると思うが昨日、商店街で悪魔が現れた。」

ザワザワ、生徒が動揺する。

「少しおとなしくしろ。」

先生の一言で静かになった。また先生が話し始める。

「アースにも悪魔が現れた。もし悪魔にあつたら、ちゃっちやと逃げろよ。以上だ。」

「先生。悪魔ってどんな姿をしているんですか？」生徒の誰かが聞く。

「骸骨だ。他に質問がある奴はいるか？」

「……。」

「何も無いようだな。それでは、ホームルームを始めろぞ」

先生はすぐにホームルームを始めたが、生徒はまだ動揺が隠せないらしい……。」

これから時間がたち、学校が終わった。

僕と盟は超魔力図書館アースライブラリにむかった。

すると後ろから鈴が話しかけてきた。

「ねえ、二人でどこに行くの？」

『アースライブラリ超魔力図書館だよ。』 盥は面倒そうに応えた。

「私もつれてつてよ。」

「どうする陣？」

「かっつてにすればいいと思う。」

「だつてさ。」

「じゃあ、かっつてにするわ。」

鈴も一緒に超魔力図書館に行くことになった…。そして、何のために超魔力図書館に行くのか、理由を鈴に話した。

しばらくし、ついた。

「早速、悪魔について調べるか」盥が言う。

「テレパシー検索機能を使いましょう」鈴が言う。

テレパシー検索機能とはテレパシーを使って必要な資料を検索してくれる機能だ。

『悪魔 検索』鈴がテレパシーを使う。

「悪魔についての資料はありますが一般人には公開できません。」

「えっ、何で公開できないのよ。」鈴が驚いたように言った。

「そんな、ここに来た意味が無かつたつてことか」肩をおろして盥が言う。

「仕方が無いからかえる？」僕は二人に尋ねた。

「『そうだね(そうだな)』」鈴と盥は仕方なさそうに応えた。

三人はそれぞれの家へと向かった。

その頃、三人はこれからあんなことがおきるなんて誰も想像していなかつた…。

カーカーカア〜 カラスが今までの楽しかった日々に別れをつけるように鳴いていた…。

### 第三章

【第三章】 スキル

アースライブラリ

超魔力図書館から家に変える途中だった。最近は楽しいことが無いからとか自分に言い訳をいいながら、いつもは不気味で通ったことのない林を通ってみることにした。

ガサガサ、木が揺れる。

ゴソゴソゴソ、少し遠くの方から何か喋る声があった。その声はどこかで聞いたことがあるような気がした。

でも、誰の声かわからなかった。だから、僕はそれを確かめるために声がするほうにいった。

「滅悪能力ハ、マダ見ツカラナイノカ。」

「申シ訳アリマセン悪魔デビル・ナイン様。モウシバラクオ待チクダサイ。」

「ヤツヲ早メニツブサナケレバ、後々ニヤツカイニナルゾ。」

うっ、僕はあいつ等の顔を見て叫びそうに名った。

何でこんなところに悪魔がいるんだ？。滅悪能力っていったいなんなんだ？。とりあえずここから離れないと。僕は鉛をつけたみたい  
に重たい足を動かす。僕は奴等に見つからないようにゆっくりと歩き出した。

しばらくして、林を抜けた。まだ、心臓がドクドクとなっているのがわかった。僕はテレポートを使って家の前にワープした。なぜ僕が悪魔の近くでテレポートを使わなかったのはちゃんとした理由がある。テレポートは大きな欠点がある。ひとつは移動したときの風圧でワープした場所が簡単にわかる。二つ目は精神状態が不安定だと使うことができない。悪魔の近くでは精神状態がかなり不安定だったのだ。そして、悪魔の近くだと追われる危険があったのだ。

僕はご飯も食べないで布団の中に入って寝ようとしたが、さっきのことが気になってなかなか眠れない。

『盥、聞こえる？』僕は盥にテレパシーを使った。

『聞こえるよ。陣。一体なんのようなんだ？』

『……。やっぱりなんでもない。』盥に心配をかけたくなかったから言うのをやめた。

『そうか。なんでもないか。何かあったらいつてくれよ。』

僕はテレパシーを停止させた。

もう一度寝ようとすると外からすごい爆発音がした。

僕はベットから飛び出し、爆発音がする方へ向かった。

『盥、聞こえる？』

『聞こえるぞ』

『爆発音がなったのわかった？』

『わかったけど。それがどうかした？』

『そこへ今向かっているんだけど、盥はどうする？』

『俺も今向かっている。続きは後で……。』

僕はテレパシーをやめて、しばらく走った。

「はあはあ」僕は息を切らして目的についた。そこには盥と青い目の少年がいた。

「来たか、陣」

「ここで何があつたんだ？」地面に描かれた赤い魔法陣を指していた。

「俺にもわからねえ。ちょっと見に行こうぜ。」二人は魔法陣に向かって歩き出した。僕と盥があと一歩で魔法陣を踏もうとした瞬間、青い目の少年が僕らを突き飛ばした。

「おい！何すんだよ」盥が叫ぶ

「黙れ！口答えするな。死にたいのか。」少年は魔法陣に向かって石を投げた。その石は一瞬でとけてしまった。

「……」何も声がでなかった。

「また君が助けてくれたんだね。ありがとう」僕は顔に笑みを浮かべていった。

「お礼はいい、消える」

「その前にきみの名前を覚えてくれない？僕は陣で隣は盥」

「一雙？羅だ。」

「御前はいつたい何者なんだ？」盃が問いかける。

「魔術師。今、悪魔がプレスルをのっとろうとしている。それを阻止するために滅悪スキルを持つ者を探している。」

「滅悪スキルって？」僕が聞いた。

「滅悪スキルはアースにある滅悪能力、滅悪呪文デバリスにある滅悪妖体、フェレベスにある滅悪靈魂のことを言う。そのスキルはそれぞれの都市のどこかに隠されているらしい。そのうちの滅悪呪文はてにいれた。そして、滅悪能力がアースのどこかにある遺跡に封印されているらしい。」

「遺跡ってどこにあるんだ？」盃がきく。

「わからない」下を向いて？羅がいった。

「遺跡なら、北のほうにあるって聞いたことがあるよ…。」

三人はそれからいろいろ話をして、遺跡に向かって旅をすることになった。ちょうど、明日から超能力専門学校が長い休みになるところだった…。

## 第四章

### 【第四章】旅立ち

僕たちは遺跡に行くために出発しようとしていた。しかし、まだ盥がきていなかった。

「もう出発の時間だ。いくぞ。」イライラした口調で言う。

「ちよつとまって。」

「遅れたやつが悪い。」

「今、テレパシーで連絡を取るから。少しまって。」

「はやくしろ。」

「わかった」

『盥、きこえる？』テレパシーを使った。

『ああ。聞こえる。』元気がない声で言う。

『もう出発の時間だよ』

『ゴメン、風邪ひいたからいけない。』

『わかった。じゃあね。』

僕はテレパシーやめた。

「？ 羅、風邪で盥これないらしい。」

「そうか、いくぞ陣。」

「わかった。」僕は親友の盥がないのが少し不安だったけど新しく始まる冒険に胸を踊らしていた。

しばらく歩いているとビルが立ち並んでいた風景から田舎へさらには野原、森へとかわり、小さな村にたどりついた。この村はとても静かだった。まるで、誰もいないかのよう…。

「もう、暗いから。ここで寝床を探そう。」？ 羅がいった。

「わかった。あの家にきいてみよう」僕は近くにあつる木でできた家を指していった。

コンコン、僕は家をたたいた。

「誰かいませんか？」

「……………」

「誰もいないのかな？次に行ってみよう。」  
隣の家に言った

コンコン、「誰かいませんか？」

「……………」また、何も返事が無かった。この時、二人は少し違和感がしていた。

？羅と陣はそれぞれで手分けして家をノックすることにした。

一軒、二軒、三軒といくつもの家をノックしたが、一軒も応答したところはなかった。二人は恐る恐る家のドアを開けてみた。家の真ん中にはすぐリアルな人の石造が三体おいてあった。床、全体には灰色の魔法陣が描かれていた。

「そういうことか。」？羅は一人で何かな得したみたいにならずに気がいらなかった。

「どうゆうこと？」僕は？羅にきいた。

「誰かが魔法でこの村の人々を石化させたってことだ。」

「誰がそんなひどいことを…。」

「わからない。あの魔法陣を破壊したらこの人は元に戻すことができる。」

「どうやったら壊せるの？」

「魔法分解が成功すればできる…。できるかわからないけどやってみるか。」と言って、？羅は杖を持った。

「我、一雙？羅の名において命ずる我が魔力を用いて我が杖の力でこの魔法陣を魔滅せよ。魔法分解、発動。」杖からたくさんの青い光がいくつもの数字になって魔法陣に吸い込まれていく。思ったより数が大きい、このまま魔力が持てばいいが…。

これから五分たった。杖から出てくる光が弱くなってきた。

「？羅、大丈夫？」

「話しかけるな」つらそうに？羅がいった。

魔法陣がだんだん青色に変化してきえた。ドタッ、？羅が倒れた。

「？羅…」僕は叫んだ。

「あの、取り込み中すいませんが。この人は大丈夫だと思いますよ。」  
「さっきの石造の一体によく似た男の人が？羅の首を触りながらいった。「こう見えても僕は医者をやっているんです。」

「そうなんですか、よかったです。」僕は肩をおろしていった。

「それより、私たちを助けてくれたのはあなたがたなんですか？」  
「今、倒れている？羅が助けたのです。」

「この子が起きたら御礼をいはいけないといけませんね。そういえば紹介が遅れましたね。私の名前は神結謎かみむすびめい、この男性は夫の信しん、この子は息子の鍊太れんたです。」

「僕の名前は近能 陣、こちらは一双？羅です。」

「もう夜も遅いので寝る準備をしましょうか。」謎さんが言った。

「そうですね。」僕が応えた。

「おい、鍊太。布団をひくのを手伝ってくれ。」信さんが鍊太に言った。

「わかったよ。父さん。」少し面倒そうにいった。

僕たちは床に布団をひいた。僕は布団に入り、少し？羅のことを気にしながら寝ることにした…。

#### 第四章（後書き）

? 羅「あれ！俺、倒れちゃってるし」

陣「そうだね。でも、次回にはきつと復活していると思うよ」

? 羅「そうだといいんだけどな」

信「次回には回復しているはずだよ」

? 羅「それはよかった。って御前誰だよ！」

信「僕は神結 信だよ。次回は僕が大活躍するかも…。続きもヨロシクね」

陣 & amp ; ? 羅「次回もお楽しみに」

## 第五章

【第五章】捻じ曲がり？

俺はゆっくりと目をあけた。そこには見慣れない天井や壁があった。起き上がるうとしたが体が震えていうことをきかない。そこで、今までのことを整理することにした。俺は確か石化した人を助けるために魔法陣を破壊していたような…。倒れる前の記憶が無い…。俺は必死に思い出そうとしたがやっぱり思い出せない…。しばらくすると陣がやってきた。

「？羅、目覚めたんだね。今、ご飯もってくるね」なんだか笑顔を浮かべているように見えた。しばらくして、陣が飯をもってきた。

「はい、ご飯だよ。謎さんが作ってくれたんだ。あつ謎さんは昨日、羅が助けてた人のことで他にも信さん、鍊太がいるだよ」

「そうか…。せっかくだから食べようかな」俺は右手にスプーンを持って飯を口にかきこんだ。

「いつきに食べるとつまるよ」不安げに言った。

「だいふおうふゆ、だいふおうふゆ」食べながら喋ったので変な言葉が出た。

こっちに向かって見覚えのあるような、ないような男性が歩いてきた。たぶんこいつがああ信とかいうやつだろう…。

「？羅君、目が覚めたようだね。それは良かった。僕の名前は信。昨日は助かったよ、ありがとう」さわやかな笑顔だった。俺はこいうさわやかな奴が嫌いだ。特に理由は無い。理不尽かもしれないがなんとなく好きにはなれない。

「ああ。そっちこそ俺を助けてくれたんだって…。そうだ！御前たちはどうして石化してたんだ？」

「それは…いつから石化したのかは記憶が無いもので分からないのですが…ある日、家族でゆっくりしていると遠くの方で声がしたも

のですから、そちらへ行こうと思ったのですが、足から石化して身動きができなくなり「様、塔が完成しました」という話声が聞こえてきました。それが石化する前の出来事です。その後、気がつくともた目がさめていたのです。それが昨日のことでした…。「声が震えていた。でも、俺にはそんなことはどうでもよかった。改めて思ったのだが朝よりもだいぶ体が動くようになっっていた。

「陣、いくぞ！」

「えっ、どこに？」陣は首を傾げた。

「そりゃー、遺跡に決まってるだろ。そこ意外にどこに行くんだ？陣のことだから」「この村の人を助けてからいこうよ」とか言うのだから…。

「遺跡に行く前にこの村の人を助けてから行こうよ」

やっぱり陣は優しい奴だった。でも、俺はそんな甘ちゃんではないし一個一個、魔法陣を壊していたら俺の体が持たない。下手したら死ぬだろう。「俺はこの村の人を助ける義務もないし、義理もないましてや助けるような暇人でもないってことでさっさと行くぞ。こないならおいてくぞ」俺は立ち上がり家から出て行った…。

「はあ、本当に？羅は冷たいんだから…」でも僕は知っている。君はそんなにひどい人じゃないってことを本当はとても優しい人だっ…てことを…。

「まってよ？羅、僕も行く！」僕は昨日、鍊太に前まで一（石化する前）はなかったという灰色の塔が建築されていたということを聞いた。きっとそこにこの村の人を石化した黒幕がいるのだろう…。

「？羅まってよ、あの塔に行くんでしょ！」

「黙ってついてこい」？羅の歩く速度が少し速くなった。

## 第六章

### 【第六章】遺跡と神結かみぶすび

僕と？羅は塔の前についた。塔の入り口には二人の門番、違つ、二体の妖怪が立っていた。

ゴソゴソ、後ろの草むらからおとがした。

僕は後ろを振り向くと、？羅が少年をとりおさえている。その少年は鍊太だった。

「陣、このガキどうする？」

「どうするっていわれてもなあ」頭をかきながら応えた。

？羅はゴンツと鍊太を軽く…たぶん軽く殴った。「とりあえず殴つとくか」

「殴つてから言わないでよお、イタタタタ」鍊太は半泣きになっている。

「手加減はしたんだよね？」

「こんなガキに本気でなぐんねえよ」

「とりあえず、ここは危ないから帰ったほうがいいよ」

「そうだぞ、ガキは御家に帰って寝てな」

「ちよつと、バカは黙ってて。話がある」

？羅が今にも殴りかかりそうな殺気をはなっている。

「あの塔の一番上にはおそらく黒幕がいるとおもつ。だけど、重要なのはそんな事じゃない。あの塔の下には遺跡がある。そのほくらに知識の像があつて、それを覚醒させるとある能力ちからを手に入れる事ができるだつて」

「でも、覚醒させる為にはどうすればいいの？」

「とある一族の不思議な能力ちからを使うと覚醒するんだつて。まあ僕の事なんだけね」

「不思議な能力ちからつてなんだよ」

「行けばわかるよ」

「じゃあ、とりあえずあの門番をぶつつぶすか」

「そうだね、頑張れ？羅！」

「人任せだな。別にいいけど、我、一いっ双？そん羅の名において命ずる我が魔力を用いて我が杖の力を武器に宿せ武器強化魔法：水、発動」

？羅は門番にむかつてすごいスピードで走った行く。

門番はそれにきずき？羅に噛み付いてくるが、剣でそれをはらう。後ろからもう一体の門番が襲いかかってきた。

？羅はよけきれず、もろに左肩をやられた。

「いつてえなあ、ああもう怒った。本気でやってやる。我、一いっ双？羅の名において命ずる我が魔力を用いて我が杖の力を全身に宿せ身体強化魔法：水、発動」

杖から水がふきだし、？羅の体に吸収された。手には水掻き、顔にはエラ、全身にウロコができ、双剣は一本の巨大な矛に変化した。その姿はまさに魚人である。

『何か勢いで魚人化しちまったけど、十秒ぐらいしかもたねえぞ』

「仕方ねえ、さっさと終わらせるか」と呟くと一瞬姿が消えたかと思つと門番が倒れ、？羅はもとに戻っていた。

「はい、おしまい。さっさと行くか」  
門を通り塔の中に入った。

「これからどうするんだ？早くしねえと他のがくるぞ」

「とりあえず床を壊して」

「それ、本気で言っているのか？」？羅は少し動揺したようにいう。コクリと錬太は頷いた。錬太の瞳には迷いのないいい目をしていた。

「仕方ないからやるか、ハァー。」ポケットからペンらしきものを取りだし、床に何かを書き始めた。

この下には遺跡があつて、きつとすごい罠トラップとかあるのだろう。この先がどんな危険がもちうけているか分からないけど…。

？羅は顔をそつとあげて「行くぞ」と行つた。

ゴゴゴゴゴゴ、いきなり床が崩れた。うわあ〜。

「おい、大丈夫か」

「うつつうつつうう」僕が目を開けると人影が…。？羅だ。

「おっ、やっと起きたか。あんまりにも起きないから死んでるのかと…。ちよつと焦ったぜ」

「ごめん。錬太は？」

「ほら、そこで元気にはしゃいでるよ」僕の視界には錬太は映っていなかった。否、見えなかった。いなっかつた？

「ちよおつと錬太を連れてきてくれるかな」

「OK。分かった」？羅は後ろを向き「錬太ー。ちよつとこい」と叫んだ。

「なんだい？陣兄ちゃん」声は聞こえる。でも、見えない。これはふざけている訳ではない。

「ごめん。錬太。君が見えないよ…」僕はゆっくりと言葉を濁して言う。

「こんな状況でそんな冗談言ってるじゃねえよ」

「嘘じゃない。本当だよ」

「まだ言ってるのかよ。変なところぶったか？」

「嘘は言ってるないよ。？羅兄ちゃん。やっぱり思ったとおりだ。陣兄ちゃんが僕を見ることができないということは遺跡に選ばれたんだね」

「どういうこと？」

「そのまんまの意味だよ。陣兄ちゃんには滅悪能力を保管するだけの器がある。その器があるものが遺跡に入ると僕たち神結一族が見えなくなるんだよ。不思議だよ」

「そういうことか。昔にそんなうわさを聞いたことがあったが、本当だったのか。まあこれで陣がおかしくなった訳じゃなさそうだし、いくか」

「そうだね」と僕。

「もちろん」と錬太。

僕たち三人は遺跡の中の暗い道を歩く。といつても一人だけ僕には見えなくなっているんだけど…。

遺跡の壁はどこどころ絵や古代文字のようなのがかかっている。それに、光る花や虫がいるおかげであまり暗くない。だけど、遺跡の中ということ意識するとなにか畏があるような気がするし、恐ろしい獣がいそいそでもある。でも、前に進まなくてはいけない。この村のためにそして自分たちのために…。

こんなことを考えながら歩いていると前方から光が差し込んできた。出口が近いのであろう。

僕たちは光の方に向かうと外にでた。

周りは山で囲まれており、出入り口はここだけのようだ。空からは月と星の光が差し込み、広場の真ん中には大きな銅像がある。その銅像は人に翼がはえたものである。つまり天使の銅像だ。それはとてもリアルで今にでも動き出しそうな雰囲気がある。

僕が？羅の方を向くとなぜかキョロキョロと周りを見ていた。どうしたのだろうか？と不思議に思ったが声に出すことはしなかった。

「あれ？錬太はどこ行った？」と？羅。

「ここにいるよ」声がする方を僕と？羅が見る。あれ？なんで僕。

錬太が見えるんだ！

「声はするけどみえねーぞ」

「えっ僕は見えるよ」

「なんでっ」

「わかんない」

「錬太！どういうことだ？」

「えーとね。説明すると長くなるんだけど…。いい？」

「いいから、言え」

「神結家はさ、人間じゃなくて。天使なんだ。僕たちの通常姿は誰にも見えて。遺跡に近づくと滅悪能力を保管する器がある人には見

えなくなるんだ。ここまでいいね」

「ああ」

「じゃあ話を続けるね。この広場まで来ると僕たち天使は覚醒するっていうのかな。とりあえず、普通の人には見えなくなって、器があるものには見えるようになるらしいよ。僕も親から聞いたことだから本当かどうかはわからなかったんだけど、どうやら本当みたい」

「なんかよくわかんねえな」

「ちなみに銅像に宿る滅悪スキルは神結家にとって神様のような存在なんだ。人と神様スキルを結ぶ存在。それが天使であり、神結家なんだってさ」

「なんか難しいな。けど、まあいつか」

「とりあえず、行こうかな」と僕。

「そうだな」と？羅。

「そうだね」と錬太。

僕たちは真ん中にある銅像にむかって歩く。

「なんかきこえねえか？」

「別に何も聞こえ…。なんだろうこの音」

「後ろの方から聞こえるよ」

ゴゴゴゴゴ、後ろから何か崩れたような音がする。そして、足音が聞こえる。だんだん音が大きくなっていくようだ。こっちに向かってきてる？なにが？まさか…！

僕が考えたとうり、悪い予感の中した。

## 第六章（後書き）

？羅「どうもー？羅です」

陣「陣です。今回はゲストを連れてきています！！」

？羅「ほお誰だ誰だ？早く出せよ」

陣「そんなに急がなくても…。それではゲストさんの登場です。どうぞ」

ゲスト「こんばんは？それともこんにちは？とりあえず、おはようございます。ゲストの登場とかたいそうなこと言われてしまいました。ゲ

？羅「あれ？錬太じゃねーかつまんねえーの」

陣「そんなこと言っつてはダメですよ」

？羅「それでは」

錬太「さようなら」

陣「えっもう終わり？」

？羅&錬太「はい。終わりです」

陣「続きもお楽しみにー」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0998r/>

---

超魔妖霊

2011年10月17日18時53分発行